

神と人の間

——北陸真宗門徒における蓮如伝承——

和田 俊 昭

一 北陸地方と蓮如伝承

浄土真宗門徒の多い北陸地方はひさしく東・西本願寺の金城湯池であった。現在の東・西本願寺に往時の勢いはなく、すでに真宗信仰は衰弱化のプロセスの中にあるといえるが、それでも、『宗教年鑑（平成十七年版）』に記載されている宗教法人寺院数における東・西両本願寺末寺数の占める百分比を調べると、福井県三九・四パーセント、石川県六八・六パーセント、富山県六七・五パーセント、新潟県三六・九パーセントを占めており、真宗は現在でもなお一定の社会的勢力を保っているといえよう。この北陸地方には、とくに石川県加賀地方を中心にして福井・富山両県にまたがるようなかたちで、浄土真宗中興の祖と仰がれる本願寺第八世蓮如（一四一五—一九九）をめぐる伝承が残されている。それはいうまでもなく蓮如が、五百年以上前にこの地を訪れ、その精力的な布教活動によって多くの民衆を教化したことによる。

神と人の間

蓮如の北陸下向は三度あり、第一回は蓮如三十五才の時、宝徳元年（一四四九）、父存如と共に北陸に下向し、

あわせて関東・東北地方を巡歴している。第二回は応仁二年（一四六八）の五月から九月までの東北・北陸下向の旅で、第三回の北陸巡錫は文明三年（一四七一）四月から文明七年（一四七五）八月までと滞在期間は最も長い。そして、今日北陸地方に残されている蓮如伝承の大半は、この最後の巡錫の中で生まれたものである。

したがって北陸には、初代が巡錫中の蓮如に帰依して開基されたという由緒を語る真宗寺院は多く、中には本尊の番号や「御文章」など蓮如の遺品を今日に伝えるという寺院もある。また蓮如の子息や娘たちが入寺したという由緒を持ち、一向一揆の拠点となった大寺もいくつか存在している。石川県教育委員会編『石川県民俗分布図』（一九八〇年）の中の調査項目「真宗の密度」によると、調査地域一五一のうち地域戸数の百パーセントが真宗門徒である地域が八二、すなわち加賀地方では調査地域七二のうち百パーセント地域が四八、八〇から九九パーセント地域が一八、能登地方でも調査地域七九のうち百パーセント地域が三四、八〇から九九パーセント地域が二二となっており、典型的な真宗王国であることがわかる。

こうした事情から、石川県や福井県、富山県の蓮如ゆかりの寺院では、命日に当たる旧暦三月二十五日（現在では四月二十五日）頃には《蓮如忌》（レンニョサン、レンジョサンと呼ぶところが多い⁽³⁾）を勤める寺院も多く、蓮如の遺骨や名号さらに遺愛品等の開帳、蓮如絵伝の絵解きが行われ、門徒衆の間では信心と行樂をかねた寺参りで一日を過ごす習俗が今でも見られる⁽⁴⁾。また当日は、蓮如が大好きだったという草団子をこしらえて仏壇に供え、また町方の親類縁者に贈り届けて息災の便りとする慣行が続いているところもある（金沢市二俣町）。また昭和初期頃のことではあるが、金沢市の浅野川以北の人々、とくに職人衆にとってはレンジョサンといえば盛大で懐かしい行樂日であつたらしい。四月二十四日または二十五日になると、商店などでは店の人全員が向山（卯辰山）へ上つて、一日飲食を楽しんだという。これなどは藩政時代には武士階級の行樂地であつた向山が、明治以降の向山開放

によって一般の人々の絶好の行楽地となり、この山遊びにさらに蓮如忌が結びついて町衆の春の行楽という一大習俗となったものである。

こうした行事や習俗とならんで今日でも多く残されているのが、先にも述べたように蓮如をめぐるさまざまな伝承や伝説である。それらはいずれも地元の門徒衆が遠く父祖の代から五百年余りにわたって語り伝えてきたものである。こうした多くの伝承は、門徒衆の素朴な蓮如信仰を伝えたものとして、門徒の心情の中に深く留められてきた蓮如像や、あるいは本願寺の正統的教義学からはけっして見えてこない門徒の真宗信仰（民俗的真宗信仰）を探るうえで看過できないものである。これまで筆者は浄土真宗をめぐる宗教文化に強い関心を寄せてきたが、本稿では北陸地方に残された蓮如伝承を通して門徒衆の真宗信仰なるものの実態に迫ってみたいと考えている。

なお、北陸地域に残された蓮如伝承についてはその多くを、石川県の民俗学会である「加能民俗の会」が企画・編集した『蓮如さん―門徒が語る蓮如伝承集成⁽⁵⁾』に拠った。一九九八年に東・西両本願寺で勤められた蓮如上人五百回遠忌法要に先立ち、長享二年（一四八八）の一向一揆（加賀の一向一揆二十万人が、守護富樫政親の高尾城を攻め落とし、政親を自刃させた）から数えて五百年を記念して企画された本書は、福井県・富山県の民俗研究者の協力も得て北陸に残された蓮如伝承を広く調査・収集したものとしては他に類を見ないじつにユニークで貴重なものである。昔から「門徒ものしらず」という諺があるように、民俗学者にとっては真宗篤信地帯では民俗行事や民間信仰・伝承が抑圧され、民俗調査がやりにくいという先入観が働いていた。しかし、ここにはそうした真宗地帯は『民俗不毛の地』という懸念を打ち消すほどの多種多様な蓮如伝承（九十一話）が収録されている。

二 蓮如伝承の諸相

さて文明三年（一四七一）、越前に下向した蓮如はちょうど加賀との国境にあたる吉崎に本願寺を再建し、四年間同地に足を留めた。この間、吉崎を拠点にして積極的に各地に出向き布教を行ったといわれている。いわゆる蓮如伝承はその頃に滞在したり、出向いた先々に今も残されているわけであるが、それらの多くは通常は弘法大師の霊験譚として伝えられるものと同工異曲である。そこでは蓮如はもっぱらマジカルな力を駆使して奇蹟をおこす神秘的な霊能者として語られている。そうした例をいくつか挙げてみよう。まずは本願寺のあった福井県あわら市吉崎に残された伝承である。

蓮如さんは、その夜も本堂に集まってきた門徒たちに話をしていたが、うかぬ顔の男に気づいた。「お前さま、何か心配ごとがあるのではないか。わたしに話できることならきかせてくれぬか」と問うと、「わたしは坂浜の漁師ですが、近ごろ、ぜんぜん魚がとれず、暮しが苦しくて……」と言う。蓮如さんは「ほう、それは困ったことだ。では、あすにでもわたしを船にのせて海に連れていってくれぬか」と応じた。次の日、蓮如さんは、お供の僧とともに漁師の船にのり、鹿島の森の横をとおり海に出た。しばらくすると蓮如さんは、お供の僧に紙こよりを作るよう命じた。そして、それを手にとると、ちぎっては海へ、ちぎっては海に投げこみ、両手をあわせて念仏をとなえた。すると、紙こよりは海の中で、こなご（こうなご）になって泳いでいった。それからというのも、こなごがたくさんとれるようになり、漁師の暮しも楽になったという。（朝倉喜祐談⁶）

コナゴは和名イカナゴである。蓮如忌の頃、産卵のため群れをなして浅海によせてくる。吉崎御坊の蓮如忌の間、塩屋の女性にだけ寺の縁で売ることが許され、参詣人はかならずこのコナゴを買って食べることにしていたというから、コナゴはこの時期のハレの日の食物だったのであろう。

また、蓮如が携えていた杖や使用した箸を大地に突き立てると、そこから根が生じたという奇蹟譚も多い。これらは通常、箸立伝説あるいは杖立伝説といわれるものである。金沢市木越町には次のような話が伝えられている。

むかし、蓮如さんが越前の吉崎から加賀の二俣へ行く途中、木越の佐々木安政というものの家に泊まった。蓮如さんより教えを聞いた安政は、その夜、すぐ蓮如さんの弟子になり、道休という法名を授かった。翌朝、別れを惜しむ道休に、蓮如さんは、みずから自分の木像を彫って形見に与えた。そして、蓮如さんは、梅の木でつくってある自分の杖を道休の屋敷の庭に突き立てた。すると、杖は芽を出し、やがて成長して、赤、青、黄、桃、白の五色の梅の花が咲くようになったという。その後、佐々木氏は苗字を梅木とし、道休は一堂を建てて、福千寺とした。(鯉野長政談⁽⁷⁾)

現在、この八重梅には赤、桃、白の三色が咲くという。もうひとつ同類の奇蹟譚、加賀市動橋町にある篠生寺に残された「ちまき笹」の話は寺の由来縁起として特に有名である。

文明七年(一四七五)五月四日のこと、蓮如さんが波佐谷の僧坊を出て吉崎に帰る途中、動橋で日が暮れてしま

った。それで、小右衛門という農家の家に立ち寄り、一夜の宿を願った。ちょうど、その家の母親が、うるち米でちまきをつくっている最中で「どこの坊主か知らないが、ねだりがましくいまいましい」と追ひ払おうとした。蓮如さんが「それでは泊めてもらえずとも、腹が減っているのでちまきをいただけませんか」と言うと、母親は筐にくるんだちまきを投げてよこした。蓮如さんは喜び、それを食べようとすると、中味は小石であった。母親は笑って「それを食べたら、一晩宿をお貸ししよう」と言うので、蓮如さんは「わたしの勧める弥陀の本願に偽りがなければ、この湯で篠がふたたび青葉になるでしょう」とちまきの篠を大地にさし湯をかけると、不思議なことに、篠は見る見る根を張り青葉となった。母親は驚き、五体を地に伏して前非を詫び、親子ともども蓮如さんの弟子となった。そして翌五日、蓮如さんを吉崎まで送り、無二の信者となって、自分の家で篠の道場を開いた⁽⁸⁾ということである。

「篠の道場」は寛永元年（一六二四）に篠生寺という寺号免許を受けた。山号は生竜山または粽山という。篠の葉先にちまきの跡があるので粽山としたと伝え、境内には今も篠が生えている。毎年六月二十一日の親鸞聖人降誕会にあわせて勤められる蓮如忌には、参詣者にちまきが出されるという。

これら樹木や植物に類する伝承は、念仏が栄えることを蓮如が奇蹟によって証明するといふかたちが多い。福井県あわら市吉崎（仏に供えてあったお花松が根付いた）、小松市能美町（杉の小枝が根付いた）、白山市曾谷町（土に埋めた数珠玉から芽が出て立派な榎の木に成長した）、金沢市卯辰町（炒り豆から芽が出た）、金沢市蓮如町（梅の挿し木が大木に成長した）、金沢市才田町（箸に使った榎の枝が根付いて大木になった）、金沢市二俣町（竹の杖が生えつき大きくなった。また、塩漬けの梅の実を蒔いたら芽が出た）、河北郡津幡町材木町（箸に使った山桜の

枝を地面にさすと根付いて大木に成長した）、同津幡町北横根町（昼に食べた梅干の実を地面に植えると芽が生じた）、同津幡町笠池ヶ原（使った箸の一本が大イチョウに、もう一本も松の大木に成長した）、かほく市宇ノ気町（梅の杖が根付いてみごとな紅梅を咲かせた）、富山県小矢部市水島（柿の真っ黒い種から芽が生え立派な柿木になった）など、この種の伝承はきわめて多い。

次は、富山県南砺市北山田に伝えられる、蓮如が愛用の杖で清水を湧出させたという奇蹟譚である。これは弘法大師の奇蹟譚として広く知られている弘法清水の伝承と同類の話である。

むかし、蓮如さんが越中に来た時、北山田の村へも立ち寄った。村に入ると運悪く腹痛がおきて蓮如さんは困ってしまった。ちょうど、ひとりの坊さんが通りあわせて「それはお気の毒なことだ」と言うと、懷中から薬を取り出して蓮如さんにあげた。大変喜んだ蓮如さんは「この近くに水はないかい」とたずねた。坊さんは、この近くはどうしても水はないと答えると、蓮如さんは持っていた杖で近くの地面をこつこつこつこつとついた。と、不思議なことにコンコンと水が湧いてきた。坊さんはこれを見て、蓮如さんが凡僧でないことを知り、早速自分の庵に招いて丁重にもてなした。そして、蓮如さんの弟子となり、やがて宗守山聰徳寺という寺を建てたということだ。蓮如さんが杖でついたら水が湧いたことから、この清水を村の人たちは「蓮如水」と言っている。いつも涸れることなく流れ、榎の木が美しく映えるので「榎清水」とも伝えている。⁽⁹⁾

これに類する伝承は多くは、蓮如が念仏の真実を証明するためであったり、水のない生活に苦しんでいる住民に同情したり、親切にもてなされたお礼に愛用の杖で清水を湧出させたというものだが、福井県大飯郡おおい町名田

庄、石川県加賀市八日市町、加賀市山中温泉菅谷町、同山中温泉下谷町、同山中温泉片谷町、小松市波佐谷町など
広く残されている。いずれも、地域に存在する清水の由来が、来訪した蓮如という人物と結び付けられて語られて
いる。

この他、村の事物の由来を蓮如に結び付けるということでは、じつにさまざまな話が存在している。福井県あわ
ら市吉崎の「雪がつもらぬ腰かけ石」や「片葉の葦」、福井県大野市松丸町の「腰かけ石」、石川県加賀市動橋町の
「来迎橋」、加賀市上河原町の「腰かけ石」、加賀市山代町の「御数珠と袈裟かけの松」、加賀市山中温泉菅谷町の
「お手植えの八つ房の梅」、小松市大嶺中町の「長円寺の袈裟かけの松」、石川県能美市三ツ屋町の「腰かけ石」、
白山市鳥越相滝町の「腰かけ石」と「お手植えの白縁の笹」、白山市平加町の「お手植えの一本の松」、白山市宮丸
町・米永町の「ヨシナガ柿」、白山市菅波町の「腰かけ石」、金沢市才田町の「盤持ち石」と「お手植え榎」、河北
郡津幡町笠池ヶ原の「蓮如の飲み水」と「法力谷」、同七塚町松浜の「火伏せの大イチョウ」、富山県南砺市城端の
「安産の腰かけ石」、同桂の「蓮如道」など、枚挙にいとまがない。

ところで、蓮如の杖立清水伝承の中には、蓮如が水を所望したのに断ったり、洗い米の白濁した水を与えたの
で、まったく水が出なくなったとか、金気水しか出なくなってしまったという伝承も残されているが、この話など
も一般には弘法清水伝承のヴァリエーションのひとつとして広く知られている。金沢市神宮寺町の話では次のよう
である。

むかし、布教にまわっていた蓮如さんが、神宮寺の村を通りかかった。大変のどがかわいたので、近くの農家で
水を所望したところ、ことわられてしまった。それから、このあたりでは、地面を掘ると赤い水が出るようにな

ったという。
(気谷正夫談⁴⁰)

この類話は、加賀市上河原町(どこで井戸を掘っても白濁した金気の水しか出なくなった)、加賀市山中温泉西谷(昔からたくさん出ていた水がぱったり出なくなった)などに伝えられている。これらはいずれも村人が訪れた蓮如を相手にしなかったり歓待しなかったために、怒った蓮如によって罰(タタリ)を受けた例であるが、人々にとっては歓迎されぬ事象の由緒についても蓮如の存在に結び付けて記憶されているのである。日本海の海岸べりに位置する福井市北萱生町には、老婆が蓮如に嘘をついたために罰を受けた話も伝わっている。

蓮如さんが、北萱生(現、福井市)を通った時、老婆がわかめを干していた。蓮如さんが「これは何か」と尋ねると、老婆は「牛のきんたまだ」と答えた。それ以来この浦ではわかめが生えないようになったという⁴¹。

怒って井戸の水を赤錆にして行ったり、わかめを生やさないという仕業は実際の蓮如にはあきらかに似合わぬものであるが、そこにはこの世における人間の幸不幸は来訪した聖なる貴人に対する行いの正邪によって定まるといふ思考法が働いている。

以上、北陸の門徒衆の中に生きつづけてきた蓮如伝承の一端を紹介したが、それらはいずれも、あるとき蓮如が村を訪れ、村の人々に忘れることのできぬ奇蹟を示して去ってゆくというパターンである。すでに触れたように、それらの話の内容は広く弘法大師の奇瑞として伝えられているものと大同小異である。他の地方では、村を訪れて奇蹟をおこす霊能者の役割は弘法大師や行基菩薩などの高僧が担っていることが圧倒的に多いのだが、北陸の真宗

篤信地帯ではその役割を宗祖親鸞や蓮如が担っているのである。たとえば親鸞伝承に關していえば「越後七不思議」などはよく知られているところである。もちろんこうした伝承を創り、語り伝えてきたのは真宗の門徒衆である。とすれば「門徒ものしらず」とは、この場合まったくあてはまらない。真宗門徒といえども他宗派の信者とまったく変わらないごく普通の民衆であり、本願寺法主の蓮如には弘法大師に匹敵する崇高な靈能者の理想像を贈ったのである。いわゆる「門徒ものしらず」は、「雜行雜修」を嫌う真宗信仰によって従来の民間行事や民間信仰・伝承が厳しく排除されたというよりも、むしろ宗祖親鸞や蓮如という理想の靈能者の伝承によって先行する時代のそれら――たとえば弘法大師伝承や、白山修験者などが泰澄に仮託した伝承などが吸収され、新たに生まれ変わったというのがその実態ではあるまいか。⁴³

三 ダイシ信仰

これまでの日本民俗学による伝承（伝説）研究の一応の成果によれば、各地に残された伝承や伝説は、神と人の關係において、人が神の偉大さを尊崇し、神は人に恵みを与え加護するという本来の関わり方をはっきり記憶に留めさせることをその本質とする。それは神と人、人の住む土地の事物（木や石や清水、塚や坂、峠、祠堂など）との由緒について語るものであり、その大半は来訪する神の奇蹟譚を軸に展開するのである。貴い旅人が村を訪れ、人々に恵みを施してくれる。この旅人の来訪は、すなわち神の来臨示現を意味している。柳田國男によれば、「この旅人といふのは実は神靈なのですが、不思議に日本ではどこの田舎に往っても、是を人間と全く同じ形、同じ感情をもたれた、ただ極度に貴とい御方と、いふ風に語り継いで居た⁴⁴」ということになる。こうした伝承の原型となるものが、わが国に古くから存在している、神の御子Ⅱダイシ（またはタイシ）が各地を遊行し、時に奇蹟を

行うといういわゆるダイシ伝承（伝説）である。

そもそも古代以来のわが国の神なるものの原型は、異界という一所に常在するものでなく、むしろ時期を定めて人々のもとに来訪し、彼らを祝福するという性格にあったことは、すでに周知のところである。柳田國男の場合は、神Ⅱ《祖霊》が異界である山から子孫のもとを訪れ、折口信夫の場合には、マレビトが彼方なる常世から人々を祝福するために訪れると想定されている。神なるものの原型をかたや祖霊に、かたや生身の人間に求めるという両者の間にニュアンスの違いはあるが、いずれの場合も、神は異界からこの世へと《寄り来る神》である。

ところで、わが国の神観念のもうひとつの著しい特徴は、来訪する神がみずから姿を立ち現わすことはなかったことである。すなわち、神の来訪に際しては、一般に、それら神と交わる霊能をもつ祭祀者、神の依代たちが仲介するものと考えられた。依代が神憑りする、神態かみわざするという形式の中に神は示現するのである。訪れた神がみずからは決して姿を現さない以上、神を祀る技能をそなえた特定人格——たとえば、祭りの際の頭屋神主、稚児、巫女など——を通底口としてだけ神との対面が可能となる。かつてわが国の神は誰に対しても開かれた存在ではなかったのである。

神が神を祀る者の手に捉えられていたとすれば、神のふるまいを代行する神の依代Ⅱ祭祀者と、祀られる神との区別はつきにくい。神を祀る者がしばしば神を僭称する理由もそこにある。こうして神は特定の人間の管理・所有するところとなり、あるいは神の権威によるわれつつ、神を祀る者が神そのものへと上昇・融合をとげてゆく。

そもそもこうした人を神に祀る習俗がわが国に限らず古代および原始社会の信仰としてきわめて広い分布を持ち、かつ根深く人類の心意の中に横たわっていることは、J・G・フレイザーの『金枝篇』（一九二二年）の報告に見ることができるものであるが、とりわけわが国の民間信仰史の中では著しい様相を呈しているものである。フ

レイザーは神そのものへと上昇・融合をとげた祭祀者を《人間神 (man-god)》と名づけているが、わが国の民間信仰史においても生前に神に祭られた人を《人神》と呼んでいる。したがって、わが国では神は具体的人間を離れた抽象的、普遍的原理としてではなく、つねに現実特定の人間的形姿において、つまり人神そのものとして理解されたのである。祀られる神に対する祀る者の優位性こそ、古代以来のわが国の神信仰の特性であった。

話をダイシ伝承に戻すと、そもそもダイシ（またはタイシ）とは神の御子（オホイコ、漢字では大子と書いた）のことであるが、前述のところからも容易に想像されるように、オホイコの実態は神を祭り、神憑りし、神態する祭祀者のことであろう。すなわち、ひとつの神霊を奉じて村を訪れる遊行の祭祀者（ダイシを語る人神）たちが、村の彼方から来臨する神霊として村人の畏怖と尊崇の念をもって迎えられ、忘れたい奇蹟を示して去って行く。したがって、ダイシは本来非個性的存在と考えられており、「尊くすぐれたる旅人」なら誰でもよく、けっして歴史上の特定人物、たとえば弘法大師や聖徳太子などを指す言葉ではなかったのであるが、「土地毎の伝説の管理が、すなおな何も知らない古老の手から少し歴史を知り、少し推理をする人の手に移った」ために、神の大子オホイコの役割が次第に歴史上の特定人物に仮託されるようになったと考えられる。こうした一種の「合理化」によって、伝承は信じやすく、また覚えやすくなったのである。

現在のダイシ伝承においては、そのすべてが仏教的大師、つまり仏教上の高僧や聖を名乗るに至っている。そして大師という場合、その多くが弘法大師に収斂するといふものの、そうでない場合も少なくない。大子のダイシに相当する高僧・聖なら誰でもよいわけであるから、大師信仰には信仰圏に裏付けられた地域性が存在することになる。たとえば東北地方なら慈覚大師、新潟・富山から北陸一帯なら親鸞聖人、関東から東北地方にかけては元三大師や智者大師、日蓮宗篤信地帯なら日蓮上人、白山周辺では泰澄大師、大和地方では理源大師など枚挙のいとま

がない。しかし、明らかなことは弘法大師伝承には真言宗信仰圏をはるかに超えた広がりが見られることで、ダイシ伝承で大師といえは弘法大師とする地域は全体の約七割を占めるという。つまり、真言宗の村にも弘法大師の来訪は語られるが、天台・禅宗地帯でも、やはり弘法大師は通行して奇蹟を行っているのである。弘法大師だけが宗派性を超越する要因としては、十二世紀から十五世紀にかけての高野山において大きな比重を占めた弥勒下生信仰、そこから派生した弘法大師の入定、復活信仰と、それに基づく宗派性を薄めた高野聖などの廻国修行者の活躍が推測されている。⁽⁴⁹⁾

宮田登氏によると、ダイシ信仰に関する伝承は次の五類に分類されるという。Ⅰ神樹由来型は、箸立伝説または杖立伝説として知られ、村の古木（神木・霊木）の由来を説くために作られたもの。つまり旅の旅僧が昼食をとった箸を地に刺したり、杖を地に突き刺したものが成長して大樹となったというものである。Ⅱ弘法清水型は、かつて水の乏しかった土地にある泉・井戸の由来を語るもの。旅僧に対する善行の報酬として湧泉せしめた型、反対に不親切によって封井されたという型、善行に対する報いと悪行に対する封井との両方を複合させた型がある。Ⅲ禁忌食物型は、秋の収穫物についてダイシの奇蹟が行われたことを示すもの。石芋・くわす芋伝説が知られている。ダイシの旅僧が村を訪れ、村人に畑の芋をくれと頼む。与えるのが惜しいので、この芋は食べられないといって断ると、旅僧は去ってしまい、その後この村の芋は石のように固くなってしまったという話である。芋・大根・大豆・栗・柿・柚子など話は豊富であるが、それらの収穫物はいずれも神を饗応する際の代表的食物である点で共通している。Ⅳ大師講型は、旧暦十一月二十三日夜から翌日にかけて行われる大師講についての伝説。この夜、ダイシ様が村を訪れる。そこで各家では、小豆粥・団子・大根などを供える。この夜はダイシがかならず雪を降らせる。これをダイシコブキ（大師講吹き）、アトカクシ雪などという。これは巡歴のダイシをもてなすために、隣家

の畑に食物を盗みに出た貧しい老婆の足が不自由であるので、ダイシがその足跡を隠すために降らせた雪だといわれる。Ⅴ奇蹟強調型は、話の要素はⅠⅡⅣ型のどれかに入るが、奇蹟がことさら強調されているもの、あるいはⅠⅡⅣ型のいずれにも属さぬが、村を襲う災害の救済に対し、ダイシの奇蹟が強く説かれているものである。

宮田氏は右の五類型の中で、Ⅳ↓Ⅰ↓Ⅱ↓Ⅲ↓Ⅴという変遷を図式化している。すなわち、神を丁重に迎え祀るためには、まず神のための依代・聖地の選定が行われ、次に祀るための清い水が必要であり、さらに神饌の準備という三段階を設定した場合、それぞれの段階に対応して、Ⅳ大師講型↓Ⅰ神樹由来型↓Ⅱ弘法清水型↓Ⅲ禁忌食物型となる。また、Ⅴ奇蹟強調型はダイシの呪術的能力を強める要素をあらたに付与しており、霊能高き呪者として語られるダイシ像は最も成立の新しいものとして位置づけられるという。

四 大師講と報恩講

さて、右でダイシ信仰の五種類のヴァリエーションを見たのであるが、これを先に紹介した蓮如伝承にあてはめてみると、その多くが、Ⅰ神樹由来型とⅡ弘法清水型とⅢ禁忌食物型に分類されることがわかる。北陸の門徒衆にとって、比叡の山法師によって本願寺を破却され都から下向してきた本願寺の蓮如は、何といても宗祖親鸞Ⅱ貴族の血を引く都の貴人であり、弘法大師に代わる資格を持った最後の人であった。蓮如は一種の来訪神として遇されたのであり、したがって幾多の伝承は一種の貴種流離譚として語り継がれてきたのである。

しかし容易に推察されるように、蓮如伝承の中にはⅣ大師講型のものが見当たらない。その最大の理由としては、北陸の真宗門徒にとって浄土真宗の御開山である親鸞を偲ぶ法要である「報恩講」が一般の大師講に代わる行事となっているためと考えられる。もちろんこれは蓮如の北陸布教によって民衆生活の中に持ち込まれたものであ

るが、親鸞の命日は弘長二年（一二六二）旧暦十一月二十八日であり、奇しくも一陽来復の時期、つまり大師講の時期に当たっている。したがって、報恩講は真宗門徒にとってあくまでも宗祖聖人の命日に勤める仏事であるが、同時に一年の農じまい、つまり田の神を迎え祀る収穫祭としての性格をあわせ持つものでもあった。

そもそも大師講とは、先にも述べたように、十一月二十三日の夜から翌二十四日の終日にかけて行われる行事で、関東の北半分から中部一帯、北陸から山陰地方にまで及んでいる。シモツキガユ（霜月粥）などと称して小豆粥や大根を煮たり、団子を作って、人々は眠らず夜籠りをして、来訪するダイシを迎え祀る。このダイシは神の子（オホイコ）であって、われわれの先祖がまだ冬至という暦法上の言葉を知らない前から、一陽来復の季節を感じて新たな神の子を迎え祀ろうとしたのが、その起原であると考えられている。霜月二十三日の前後は、月の半分がようやく暁に現れて、やや傾いた形で仰ぐ時期となり、それが冬至にあたる。そして日本海側では、その夜はかならず雪が降るとされた。しかも、雪はしとしとと静かに降るのではなく、普通に強風を伴って、海辺のあたりならば海が荒れるとされた。これは大師講吹きと呼ばれている。日常ではあまり経験しない強風は神の来臨の兆候であり、積雪は来臨した神の証しと受け取れるものである。そしてこの大師講は、旧暦十一月に先祖神＝田の神を迎えて行われる農家の収穫感謝祭、つまり村々の新嘗の祭（霜月祭）と起原をひとつにするものと考えられている。

古くは農民たちは収穫が終わってから約一ヶ月の物忌みの期間を経て、初めて新米を食べる収穫祭をしたらしい。この祭の日取りが地域によってまちまちであるのは、土地による農事の遅速を反映するものとされている。たとえば九州北部一帯などでは十一月の初めの丑の日に、この日のために田に残した稲株を主人自ら刈り取って家に持ち帰り、臼を祭壇としてその稲束を飾り、餅・神酒・大根などを供えて祀る。丑の日に行うのでオウシ様などとも呼ぶが、稲を依代として田の神（山の神）を祭るのである。その他の地方ではこの月の満月または下弦の日を選

んで神祭を行う。中国地方その他では霜月三夜といって、年に何度か行われる二十三夜待（月待）の中で特に霜月の二十三夜を大切にするが、これなども新嘗の祭と考えられる。そして山陰地方から関東北半分までの広い範囲ではこの夜から翌日にかけて、貴い旅人が年に一度村々を訪れる伝え、この日を大師講と呼んでいるのである。新嘗の祭（霜月祭）の供えものとしては広く餅の他に小豆粥や大根が用いられる。また日本海側では、二十三日の晩にはかならず雪が降るといふ俗信があり、これなどはいわゆる大師講が行われている地域をはるかに超えて行われているといふ。

この新嘗祭で特に有名なのは、能登半島の珠洲市・鳳至郡などで旧暦霜月五日（現在は新暦十二月五日）に行われる田の神に新穀を供えて感謝する収穫祭、アエノコトである。アエは饗で、アエノコトとは来訪する田の神を饗応する祭という意味である。田から上がって来られた田の神を迎えて、ちょうど貴い賓客に接するように、家々の主人がカミシモを着て、自ら歓待の任にあたる。たとえば、その晩は炉辺に田の神を案内し、「どうぞおあたり下さいませ。お寒うございましたやろさかい、ゆつくりと休んで下さいませ」と挨拶し、次に風呂に案内して、「熱うございますか、ぬるうございますか」と、しばらく脇に控えている。それから床の間に招じて、膳の品々の一々を、ご飯でございます、お汁でございますとすすめる。また甘酒も出し、最後に、一斗箕に二股大根と鏡餅を供え、「だいたい世の中が宜しゅうございます。千秋万作も続いたお鏡でございます。お上がり下さいまし」とすすめるという。今日ではアエノコトの行われる範囲は狭いが、あくまで擬人的な作法とともに、田の神祭の古式を伝えるものとして知られている。

こうした田の神の来訪が広く一般には「おダイシ様」の来訪として語られてきたわけだが、さらにそれが真宗門徒によって宗祖親鸞の来訪に置き換えられる時、大師講はおのずから報恩講に変化してゆく。今日、報恩講といえ

ば一般的には真宗の宗祖親鸞を偲ぶ行事を指すのであるが、振り返ってみるとこれも蓮如以降のことである。そもそも報恩講とは仏教各派の祖師忌日に修される報恩謝徳の法会のことである。たとえば新義真言宗の開祖覚鑿忌なども報恩講として称しているが、真宗では本願寺第三代覚如が『報恩講式』を作成して講会形式が整備され、のちに蓮如が「御俗姓」や「御文章」（五帖十一通目）を著して、教団の発展にともなって報恩講は全国各地の末寺や門徒の間に浸透していった。

十一月に入ると、二、三十戸までの近隣門徒を集めた小寄講では各家輪番で報恩講を勤め、共同飲食をする。仏間で正信偈と念仏和讃が唱和され、続いて御文章の拝読が行われると、いよいよ座敷でのお齋に移る。北陸地方は報恩講が盛大に勤められることで特に有名であるが、「親鸞様の好物だった」と言われる小豆を使った料理（小豆粥、イトコ煮）や大根の煮物などが報恩講料理として供されることが多い。その他食べきれないほどのさまざまなご馳走が並び、新米の御飯も山盛りにされる。そして報恩講に参加した人々は一時の共同飲食によって、お互いの間に一味同心の強い連帯感・一体感を確認するのである。門徒同士が互いに招かれ招きあう地域の小寄講はそのまま寺での大寄講につながってゆく。すなわち、小寄講の報恩講が終わると門徒は地域や手次の寺に参詣し、あらためて寺での数日間の報恩講を勤めるのである。とくに寺での報恩講の最終日には「御満座荒れ」とか「〇〇寺荒れ」といって、かならず強風が吹き、雪が積もるとされた。非日常的な強風や積雪は御開山様の来臨の証しと歓迎されたのである。²⁴ 西山郷史氏によると、奥能登地方は圧倒的な真宗地帯であるが、アエノコトを勤めるのは真言宗や曹洞宗の檀家であることが多く、真宗門徒宅では「概して簡素である」という。²⁵ このことからしても真宗門徒が勤める盛大な報恩講が、実質的には農民の素朴な豊穰感謝の祭、つまり新嘗祭や大師講を引き継ぐものであったことが首肯せられる。

五 もうひとつの蓮如伝承

さて、右では蓮如伝承をダイシ伝承との関係で見えてきたのであるが、蓮如伝承が幾多のダイシ伝承と決定的に違つてユニークなのは、蓮如には数多くの名号伝承が存在することである。実際、蓮如の名号は彼に帰依した者が興した村の道場（寺院）を中心にして、今日まで少なからぬ数が保存され伝えられている。それはすなわち、蓮如が弟子に書き与えた名号が種子となつて村に念仏の道場が生まれ、やがて道場を核とする真宗信仰が村人たちの精神的解放の支柱として機能してきたという事実を明かすものである。

大谷の本願寺を破却された蓮如は北陸地方では捨て身の布教を行つて、精力的に名号や御文章を書いたこと有名である。蓮如は「他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像と云なり。当流には木像よりは絵像、絵像よりは名号と云なり」と述べて、浄土真宗における名号（南無阿弥陀仏）の意義を特に強調しているが、帰依した門徒に名号を書き与えることは本願寺法主としての蓮如に課せられた最大のつとめであつた。加能民俗の会編著『蓮如さん―門徒が語る蓮如伝承集成』には全体で九十一話の蓮如伝承が収録されているが、そのうち二十話が名号に関する伝承であり、全体の二〇パーセントを超えている。名号伝承は蓮如をめぐる伝承の中でも類話数が最も多いのである。

石川県加賀市山中温泉下谷町に伝わる「虎斑とらふの名号」という話は次のようである。

むかし、蓮如さんが竹田の峠（現大内峠）を越えて下谷に立ち寄つた時、蓮如さんの疲れた様子を見た村人が、自然薯をすってさしあげた。おかげで元気のもどった蓮如さんは、お礼としてござの上に紙を開いて六字の名号

を書き、村人に与えた。この名号は、筆跡にござの縞模様が写って、虎の縞のように見えるので「虎斑の名号」と呼ばれている。（大蔵延平談^の）

山中温泉下谷町では、毎年蓮如忌にあわせ「虎斑の名号」を蓮如堂で開帳しているという。蓮如の名号伝承には、右の話のように奇瑞を起こす蓮如の姿がまったく見られない場合と、そうでない場合とが混在している。いずれにせよ蓮如が名号を書いたという伝承は、福井県あわら市吉崎（草の筆で名号を書いた）、同吉崎（嵐の中で名号を書いて船に取り付けたら波が静まった）、あわら市浜坂（山のつくしを筆にして名号を書いた）、福井市桃園（笹の葉に名号を書いた）、福井県小浜市（暴風雨の船の中で名号を書いて海に投じたら海が静まった）、石川県能美市三ツ屋町（路傍の木槿を筆にして名号を書いた）、白山市平加町（鷹の羽で名号を書いた）、金沢市四十万町（藤蔓で名号を書いた）、同久安町（名号を書いて浄土三部経をあげると幽霊が成仏した）、同無量寺町（蓮如の弟子が舟に着いているアワビ貝をはがしたら、内側に名号が現れた）、同二俣町（赤ん坊のために名号を書いたら、親が蓮如の無二の信者になった）、同砂子坂町（蓮如を水と団子でもてなした老婆に名号を書き与えた）、同砂子坂町（別れを惜しむ人々のために、足元に落ちていた黒い石に名号を書いた）、珠洲市内浦町布浦（蓮如が書いた名号を拝んだため子供を授かった）に残されている。

蓮如の卓越した霊能者ぶりをとりわけ強調する不思議話もある。次の話は石川県能美市来丸町のものである。

来丸村にやってきた蓮如さんは、ある家で一夜の宿を乞うた。しかし、蓮如さんのみずばらしい姿を見ると、出て来た老婆はすげなく断った。ところが、仕方なく帰って行く蓮如さんの後ろ姿に後光がさしている。これを見

た老婆はあわてて呼び止めたが、蓮如さんはすでに手取川を渡ってしまった。向岸で我を忘れて呼びかけている老婆に、蓮如さんは手ぬぐいをひろげるように言った。そして、持っていた矢立てから筆をとりだすと、空中に「南無阿弥陀仏」と書いた。すると、老婆の手ぬぐいに六文字が鮮やかに写し出されたという。この手ぬぐいは「川越の名号」と呼ばれ、金沢の専光寺にある。

「川越の名号」の話は親鸞が行った奇瑞として新潟県上越市柿崎町に伝承されているものがすでに有名であるが、同類の蓮如伝承としては金沢市卯辰町（卯辰の川越の名号）、同蚊爪町（蚊爪の川越の名号）にも伝えられている。

この他、蓮如が自分の真影（寿像・御影）や自分の木像を形見がわりに門徒のもとに残したり、御文章や正信偈を書いて与えたり、帰依した弟子に法名を授けたという伝承も少なくない。次は小松市能美町の正賢寺に伝わる話である。

能美村に刀鍛冶の藤原将監家次というものがいた。家次は刀匠国次の子だという。寛正六年（一四六五）、比叡の山僧が大谷本願寺を破却した時、家次は京に馳せ参じ、本願寺のために働きがあった。大いに喜ばれた蓮如さんは、家次の求めに応じて性賢という法名を授けた。文明二年（一四七〇）五月二十八日、性賢が郷里に帰るところになると、蓮如さんは、日付を記した寿像一幅と正信偈を与えた。翌年、吉崎に来た蓮如さんは、性賢に乞われて能美村を訪れ、家次の庭に杉の小枝をさすと芽を出し、年経るごとに枝葉が繁茂した。その葉の形がイブキに似ているのでイブキ杉といい、一名お花杉という。また性賢は一刀を鍛えて蓮如さんに贈った時、真筆六字の

名号をいただいたという。(藤原正磨談²⁹)

性賢の子孫は代々刀鍛冶をしていたが、貞享年間、六世家次の時に帰農して道場をつくり、性賢寺と称したが、明治十二年に許可を得て正式な寺院(正賢寺)となった。蓮如の遺物は右記の寿像と正信偈、真筆六字名号の他、一枚起請文、御文章(一帖目十五通のもの)、蓮如の遺骨がある。したがって、右の話の多くは、一部において荒唐無稽な奇瑞話を含みながらも、蓮如の行実を比較的忠実に語り伝えたものと考えられる。

この他、福井県吉田郡永平寺町上志比(自画自賛の真影を興行寺に残して行った)、石川県加賀市山中温泉栄町(山中温泉での湯治中に御文章を書いて燈明寺に残した)、小松市今江町(弟子の願勝に自分の木像を与えた)、小松市松岡町(別れを惜しむ人々に自分の木像を残した)、小松市高堂町(弟子に自分の寿像を与えた)、白山市御影堂町(弟子に親鸞聖人と自分の連座御影を授けた)、白山市菅波町(一夜の宿を借りた村の神社に神号を書いて残した)、金沢市木越町(別れを惜しむ弟子に自分の木像を与えた)、石川県河北郡津幡町御門(弟子に自分の木像を与えた)などに類話が伝えられている。これらも名号伝承と並んで、民衆の中に飛び込んで精力的な布教を行った蓮如ならではの無類の伝承といえることができる。これら遺品として残された名号や木像の多くは道場主や門徒たちによって大切に保存され、今日に伝えられている。したがって、これらの伝承の中には「川越の名号」のようにこゝとさら霊能高き蓮如を強調する話も存在しているものの、全体としては当時の蓮如の実際の足跡を色濃く残す伝承と考えられるものも多く存在しており、その意味でも先に見たダイシ伝承につながる一連の蓮如伝承とはあきらかに一線を画するものといえるのではなからうか。

では、蓮如によって法名や名号、さらには寿像や御文章などを授けられたのは、いったいどのような人々だった

のだろうか。蓮如伝承の中には福井県あわら市吉崎に伝えられる「嫁おどしの肉付面」のような女人救済譚もいくつか存在している。⁸⁰しかし、実際に蓮如に帰依し法名を授かって弟子になってゆく人々の姿を蓮如伝承の中に探つてゆくと、その前身は農民・武士・天台僧や真言僧（おそらく彼らの多くは白山や石動山の修験者と思われる⁸¹）・刀鍛冶などじつに種々雑多であるにしても、いずれも彼らの家の多くは村の惣道場となり、後に本願寺から木像と寺号を下付され寺院を称するようになってゆくことが知られる。

すでに紹介した加賀市動橋町の篠生寺（篠の道場）の縁起や小松市能美町の正賢寺の縁起などがそれであるが、石川県加賀市山中温泉菅谷町の徳性寺、同山中温泉栄町の燈明寺、小松市今江町の願勝寺、同上本折町の長円寺、性松岡町にあった松岡寺、同高堂町の常念寺、能美市三ツ屋町の宝海寺、金沢市笠市町の照円寺、同四十万町の善性寺、同扇町の広済寺、同卯辰町の持名寺、同無量寿町の寿福寺、同木越町の福千寺、河北郡津幡町御門の広勝寺、かほく市松浜の専通寺、富山県南砺市法林寺の光徳寺などの縁起も同類である。

また、石川県内真宗寺院の由緒書を読むと、じつに二〇八ヶ寺の真宗寺院が蓮如に仮託した開創の縁起を伝えている。⁸²すなわち、寺院の開基にあたる人が蓮如に帰依して法名をもらって弟子となり、道場を開いたが後に本願寺から寺号を許可されたという縁起である。これら道場や寺院の中には火災で縁起を焼失させたり、明治時代に入っても正式な寺院に昇格することなく道場のまま廃絶した例も少なくないと考えられることから、蓮如伝承を伝えていた真宗寺院の実数はそれを超えてさらに膨らむのではないかと想像されるが、いずれにせよ蓮如という人物が北陸地方の宗教的風土に与えた影響の広さと深さに驚かされる。

六 おわりに

「加能民俗の会」の西山郷史氏によれば、北陸の門徒衆は蓮如に対して二種類の呼び方をしているという。すなわち、「それが祖霊に近い身近な存在である時、蓮如さんと親しみを込めて呼ばれ、宗教的権威者、本願寺八世の立場が前面に押し出される時、蓮如上人と崇められる」というわけである。蓮如に向けられた呼称のおそらくは無意識の使い分けは、いうまでもなく残された蓮如伝承の二重性に由来している。

ひとつは、古くからのダイシ伝承の系譜に連なる蓮如伝承の中の蓮如像である。それはあきらかに来訪神として遇される蓮如であり、マジカルな力を駆使して奇蹟をおこす神秘的霊能者として語られる蓮如である。すでに見てきたように、蓮如の名前は人々が生活する村の土地の記憶とともに語られる。ここでの蓮如は村の歴史の原初に來訪し、人々の畏敬歓待の念によって迎えられた神霊と等しい存在であるから、「蓮如さん」とか「蓮如さま」という親しみを込めた呼称以外はいないだろう。もっとも蓮如が来訪神として祀られてゆく過程に、貴族の血を引く身分にもかかわらず蓮如自身の身に具わった天性の親しみやすさ、庶民的性格というものが大きく働いたことは言うまでもないことであるが。

神と人の間

もうひとつは、こうした伝説的蓮如像と一部重なりながらも同時に一線を画して、本願寺法主として精力的に名号や御文章を書き、寿像や木像を授けたという史実を踏まえた蓮如像である。そこでは蓮如は、単純に神と同等の存在として語られるのではなく、むしろ宗祖親鸞の教えの再興を願って人々と親しく交わり、身分を問わぬ阿弥陀如来の救済を説いて誰にでも気安く名号を書き与えた人物、すなわちその後の北陸の歴史と深い関係を結んだ本願寺の礎を築いた宗教的権威者として語られている。晩年蓮如が「おれほど名号かきたる人は、日本にあるまじき

ぞ⁶⁴」と側近に語ったというのは有名な話であるが、北陸における蓮如伝承の最大数は、まさしく真宗再興のために身を捨てた一人の宗教者の確かな足跡を語り伝えるものなのである。

北陸に残された蓮如伝承は、ある時は来訪神として祀られる存在として、またある時は民のためにつねに仏の救済を説き続けた頼もしい宗教者としての蓮如の姿を伝えるものである。だが「蓮如さん」と「蓮如上人」は決して対立するものではなく、その分かちがたい二重性、つまり神と人との間にこそ、今日まで蓮如が北陸門徒にとって親しみを感じるとともに、深く共感することのできる魅力的な宗教的存在であり続けた理由が存在するのかもしれない。

註

- (1) 文化庁文化部宗務課『宗教年鑑（平成十七年版）』、文化庁、二〇〇六年、三六ページ。なお、北陸四県における東西両本願寺の末寺数については、真宗大谷派の三条・高田・富山・高岡・能登・金沢・小松・大聖寺・福井の各教務所、浄土真宗本願寺派の新潟・国府・富山・高岡・金沢・福井の各教務所に問い合わせた。なお、北陸地方には近年真宗大谷派から転派した真宗東本願寺派の寺院も少なからずあり、これも加えると真宗寺院が占める百分比はさらに上昇する。
- (2) 石川県教育委員会『石川県民俗分布図―緊急民俗文化財分布調査報告書』、一九八〇年、四六ページ
- (3) 前掲書、六二ページ
- (4) 蓮如忌習俗は全国的に広く行われているが、おおよそ三つのタイプに分類される。すなわち、蓮如の命日に法要を勤め、蓮如遺品の開帳や絵伝の絵解きが行われる講行事型、福井県吉崎と京都（東本願寺）を往復する巡行型、そして北陸に多い遊楽型である。門徒が主体になって行われる春の行楽的・遊山の行事は、蓮如が自分の忌日は賑やかに楽しむのが何よりの供養と言われたからと説明されているが、蓮如の命日に中世以来の山岳信仰（石動修験や白山修験）を習合したものと考えられる。この点については、能登地方の蓮如忌を扱った桜井徳太郎『神仏交渉史の研究』（『桜井徳太郎著作集』第二巻所収、吉川弘文館、一九八八年、七一―一〇七ページ）と、富山県の蓮如忌を扱った伊藤曙覧『越中の民俗宗教』（岩田書院、二〇〇二年、四四―一四四ページ）に詳しい。
- (5) 加能民俗の会編『蓮如さん―門徒が語る蓮如伝説集成』、橋本確文堂企画出版室、一九八八年。なお、近年の全国的な

市町村合併によって市町村名が変更された場合があるが、本稿では同書で記載されている旧地名は現行の地名に改めた。

- (6) 加能民俗の会編『蓮如さん―門徒が語る蓮如伝説集成』、橋本確文堂企画出版室、一九八八年、四四ページ

- (7) 前掲書、九五ページ

- (8) 前掲書、五九―六〇ページ

- (9) 前掲書、一一七―一一八ページ

- (10) 前掲書、九二ページ

- (11) 前掲書、五二ページ

- (12) 越後は親鸞配流の地で、蒲原地方を中心にして真宗寺院も多い。このためか、動植物などの変種・珍種を親鸞が配流中に教法の正しさを示すためにした奇瑞として説明するものが多く存在している。このうち代表的なものを「親鸞の越後七不思議」と言っている。逆竹・八房の梅・数珠掛桜・三度栗・つなぎ榎・焼鮎・片葉の葦などがある。

- (13) 伊藤曙覧氏は、先行の民間伝承が蓮如伝承にすりかわっていった事例を次のように紹介している。「古くからの弘法伝説が、蓮如上人の布教後、蓮如伝承として生まれかわっても何ら不思議ではない。越中でも東砺波郡福光町（現、南砺市）山田の弘法清水が、『越の下草』の頃には蓮如清水の伝説にかわった例がある。越中は泰澄大師の伝説が少ない地方で、それが真宗の布教で緯如伝説にすりかわった。いわゆる井波町（現、南砺市井波）の乙女山伝承であるが、その他緯如上人の手植えの松が蓮如布教で、蓮如上人手植松に代わる

礪波地方の伝承もいられている」（伊藤曙覧『越中の民俗宗教』、岩田書院、二〇〇二年、四三六ページ）。

- (14) 柳田國男「伝説のこと」、柳田國男監修『日本伝説名集』所収、日本放送出版協会、一九五〇年、八ページ

- (15) フレイザーは『人間神』の概念について、「人間神の觀念、すなわち神的または超自然的な力を賦与された人間の觀念は、神々と人間とがほとんど同じ次元に属する存在と考えられ、後代の思惟では神々と人間の間に置かれた超えがたい深淵によって二者が分離されぬ前の、初期の宗教の歴史に属するものである」（『金枝篇』（二）、永橋卓介訳、岩波文庫、一九五一年、二〇六ページ）と述べ、さらに『人間神』には神靈が一時的に憑依して占易や予言を行う場合と、人間の身体に恒久的に宿って奇蹟を行う場合があるとする（同書、二〇八ページ）。ここで議論しているダイシ伝承は、後者のパタンに属するものである。

- (16) 益田勝美「魔王伝説」参照、同『火山列島の思想』所収、筑摩書房、一九六八年

- (17) 柳田國男「二十三夜塔」、『定本柳田國男集』第十三巻所収、筑摩書房、一五四ページ

- (18) 柳田國男「伝説のこと」、前掲書、九ページ

- (19) 宮田登『ミロク信仰の研究』、未来社、一九七五年、九七一―三三七ページ参照。および宮田登「大師信仰と日本人」、同『白のフォークロー―原初的思考』所収、平凡社、一九九四年、一九〇―二三四ページ参照。

- (20) 宮田登『ミロク信仰の研究』、九九―一二三ページ
- (21) 柳田國男『年中行事』、『定本柳田國男集』第十三卷、筑摩書房、一九六九年、二二―二三ページ
- (22) 柳田國男、前掲書、一七―二二ページ
- (23) 西角井正慶編『年中行事辞典』、東京堂出版、一九五八年、二ページ
- (24) 折口信夫によれば、古来わが国では雪は「稲の花の一種の象徴」であり、積雪は豊年を予兆させるものとして歓迎されたという（『花の話』、『折口信夫全集』第二卷所収、中公文庫、一九七五年、四七一ページ）。また、北陸の白山信仰圏では降雪は白山権現影向來臨の際の奇瑞とされてきたもので、門徒の親鸞信仰に吸収された先行する神信仰の古層を窺うことができる（山岸共『白山信仰と加賀馬場』、高瀬重雄編『白山・立山と北陸修驗道』（山岳宗教史研究叢書）所収、名著出版、一九七七年、四七ページ）。
- (25) 西山郷史『蓮如と真宗行事』、木耳社、一九九〇年、二四八ページ
- (26) 『蓮如上人一期記（実悟旧記）』、『真宗史料集成』第二卷所収、同朋社、一九八三年、四四四ページ
- (27) 加能民俗の会編『蓮如さん―門徒が語る蓮如伝説集成』、橋本確文堂企画出版室、一九八八年、六五ページ
- (28) 前掲書、七七ページ
- (29) 前掲書、七五ページ
- (30) 前掲書、四二―四三ページ。「嫁おどし肉付面」は蓮如を

めぐる最も代表的な伝承であり、真宗寺院における説教話としてよく説かれた。吉崎には、その肉付面を伝えるという寺院も存在する。そのほか吉崎の、ゆゆしき女人の姿をして参詣した神々（鹿島の神・白山の神）に念仏の教えを説いた話（同書、四一ページ）や、金沢市久安町の、人々を苦しめる女人の幽霊のために六字名号を書き、墓前で三部経をあげて成仏させた話（同書、八八―八九ページ）などが伝わっている。

(31) 越中（富山県）における蓮如忌の分布を調査された伊藤曙覧氏は、医王山一帯や福光地方などを中心にしてそれらがいずれも白山系衆徒の活躍が見られたところに分布しているとしており、蓮如に帰依した宗教者の実態を明らかにしている（『越中の蓮如忌習俗』、『越中の民俗宗教』所収、岩田書院、二〇〇二年、四四―四六七ページ参照）。また、石川県能登地方の真宗寺院にはもと真言宗から転派したという由緒を持つ寺院が非常に多く、これなどは石動系衆徒が蓮如に帰依したものと想像される（桜井徳太郎『神仏交渉史の研究』、『桜井徳太郎著作集』第二卷所収、吉川弘文館、一九八八年、七一―一〇七ページ参照）。このほか、真宗寺院の成立と修驗道との関係については木場明志「越中礪波の定着修驗活動」、高瀬重雄編『白山・立山と北陸修驗道』（山岳宗教史研究叢書）所収、名著出版、一九七七年、三六―三八四ページを参照されたい。

（追記）

富山県中新川郡立山町芦峯寺の富山県立山博物館では、平成十八年九月三十日から十一月五日まで「立山と真宗―御絵伝がつなぐ二つの世界―」と題して特別企画展が開催された。

その図録に蒲池勢至氏の「真宗門徒と立山信仰―二つの阿弥陀仏信仰―という論文が掲載されており、その中に、高岡市大町の称念寺（浄土真宗本願寺派）がもと立鷹山金光明院塚原称念寺と称し代々立山別当職を勤めており、文明年中に三十一代順照の時に浄土真宗に改宗したとある。称念寺は立山信仰に関わる木像立山大権現本地仏、立山曼荼羅等を伝えており、文政三年（一八二〇）には立山開山慈興上人千百回忌を勤め開帳を実施、さらに翌年には能登七尾の光徳寺（浄土真宗本願寺派）などで出開帳を実施して、立山禅定絵図の頒布、納経帳まで発行したため、この開帳をめぐる岩峯寺と争論に及んだという。一般に蓮如布教と立山修験との間には、蓮如布教と白山修験との間に見られたような深く密接な関係は今日まで十分明らかになっていないが、文明年中蓮如に帰依したこの立山別当職称念寺は、立山修験者が真宗信仰の担い手になっていったことを窺わせる貴重な事例である。

(32) 加能民俗の会、前掲書、二六七―三二三ページおよび、『石川県寺院明細帳』（金沢大学法文学部日本海文化研究室編、日本海文化叢書第二巻『加越能寺社由来』下巻所収、石川県図書館協会、一九七五年）を参照した。

(33) 西山郷史、前掲書、四五ページ

(34) 『第八祖御物語空善聞書』、『真宗史料集成』第二巻所収、

同朋社、一九八三年、四二三ページ

本稿を執筆するにあたって、富山県射水市黒河の西養寺住職伊藤曙覧先生から貴重な資料を送っていただき、また様々なご教示をいただいた。加能民俗の会編著『蓮如さん―門徒が語る蓮如伝承集成』の執筆者の一人である伊藤先生には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。